

三月二十三日

小田たつえ

終業式の帰り道はほのかなピンクが空を埋めはじめていたけど、地面にもその姿があった。

ロッカーの空白を長らく埋め続けていた課題と成果の山は、いま私の手元を占領して筋肉という筋肉に運動を与え続けている。

「おーい、車道出てっぞー」

のんきでよろしい。勝手に言っていてちょうだいな。こんな、持って帰ってもゴミ行きが確定しているものを持たせるのもいかなものか。こどもも重くちやふらついて自然とでてしまうんですよ。

こういう時に家が近いのは助かる。数分苦勞するだけで解放されるのだから。自転車組以上に得な気もする。自転車は荷物をのせるにも限度がある。今日はためにためた山の土たちを、いやがおうでも持って行かなきゃいけない。溜めずに分割して持って行けば、という声は聞かないことになっているんです。

左に曲がり、三つ目の十字路で歩道を渡って右。少し行つたところ。ゴール。鍵を開ける必要はない。何せ平日。母がいる。道を急ぐ同級生たちを背にして一言。

「ただいまー」

二階にももの上げる。自分の部屋は相変わらず足の踏み場もない。世にいうゴミ屋敷の一步手前。何回も片付けると言われたけど、手を付ける気すらおきない。今日も変わらず、荷物をぶちまけてベッドに倒れこんだ。

枕もとのスマホに近づくと、通知がたまっていた。って言うても、携帯会社のメールとか、ソシヤゲの宣伝とかだけ。文章も見えないで消す。

「あ」

流れ作業で消してた通知に、「Eメール」のやつが入ってた。アプリを開く。件だけメッセージが入ってた。ポイント欲しさにいつか登録した企業のメッセージが。つ。

「ん！」

オサムからだった。

——午後出かけたか？

学校に持ってって使ってる。悪いやつめ。

——今帰った。ええよ

今返しても、少し返信には時間がかかるだろう。なにせあいつは自転車組。それもキロくらい距離がある。重い荷物に苦しめられながら帰っているはず。帰りの道中じゃさすがに周りのこともあるだろうし、携帯を出すのは無理。

——おっけ、じゃあ〇時半にボウリング場前で

こんなすぐに返信が来るとは思わなかった。周りに同級生とかいるんじゃないの……？

——りようかい。スマホ大丈夫なん？

どうしても気になって質問した。

——気にすんな、ばれなきゃ犯罪じゃない

女の子たるもの、やっぱり多少はおめかししたい。いつかに買った化粧品を机にぶちまける。教材がどんとあつて、ほとんど上の面がない。お母さんがぼつぼつと教えてくれたことと、だいぶ前に仕入れた中途半端な知識をフル活用する。あと〇分。ボウリング場が近いとはいえ、さすがにゆっくりすぎた。化粧の時間は……「分くらい？その時、Eメールが鳴る。」

「今見る余裕ない……」

鏡に目を向けつつ、カバンの場所を探す。足元。持つてく必要のあるものは、たぶん入ってるからヨシ。

「……おっけ！」

急造の顔面に自身は無いが、ないよりはマシの精神だ。どったんばったんと階段を降り、新しいハンカチを玄関で取って、靴はいて。

「母、でかけるねー！」

「帰るとき連絡しなさいよー、あと」

ボタン！トタトタ……。

信号待ちでとっさに携帯を出す。さっきの通知が残っていた。オサムだった。着いたらEメール入れて、だそうだ。青信号。駆け私。

ボウリング場の看板が見えた。時間は、〇時〇分〇秒。ぎりぎり間に合ったって言える。看板の下にたどり着く。二十九分五十秒。ため息が出た。

——ついた

既読もすぐについた。看板の下、っていった方が良いかな。あ、来た。手を振る。気づく。にっこりして、おいでおいでされた。ぜえぜえの息を整えながら、軽めの足で行った。

「どしたよ、顔真っ赤」

「走ってきた」

「転ばなかった？」

「うん、だいじよぶ」

ボウリングは、やっぱりオサムのほうができる。あいつは百四十三で、私が九十二。

「やっぱり上手いね」

「サツキもできる方だと思っけどな。ほら、男と女で平均違うし」

そう言っても、勝ちたいんだよなあ。

「そうムスツとすんなって」

「だって」

「分かったよ、悪かったって」

「……どうしよね、この後」

「え、あ、そうだ……」

「なに？」

「また、この前みたいな状況なんだけど。いいかな？」

「また？そっか、大変だね」

オサムがうつむく。

「とりあえず連絡してみるよ」

「ありがと」

——オサムの家、またケンカして荒れてんだって。前みたく泊めていい？部屋空いてたっけ？

すぐ返信が来た。

——父いないから部屋大丈夫

——夕飯も作るからおいでって言うておいて

「大丈夫だって」

「悪いな」

「気にしないで」

こういう時に家が近いのは困る。なんともいえぬ雰囲気のまま家にながらなくちゃいけない。まっすぐ行って、四つ目の十字路で右。少し行ったところ。ゴール。鍵を開ける必要はない。何せ平日。母がいる。不安そうなあいつに言う。

「どうぞ上がって」

夕食はカレーだった。珍しく食材も豪華だった。奮発、つていうのだろうか。

「ごちそうさまです」

「いいのよ。ゆっくり食べるのは大事なことから」

「ありがとっ(ぎざいます)」

オサムはずっとぼくついていて。私もつられて、食べていた。

22時。

「二階の奥、使ってね。充電器とかそういうのもあるから使っていいからね」

「なにからなにまでありがとうございます」

母が下りていった。

「……じゃ、俺」

「あのさ」

「ん？」

「……わ、私の部屋、く、来る？」

「だめだよ、そんな」

「まだ寝るには早いでしょ？」

「……だったら、こっちの部屋来いよ」

「なんで」

「女子の部屋に入るのなんてダメだろ！」

「めんどくさいなあ。別になににするわけでもないし」

「でも何言われるかわかんないだろ、お母さん下にいるんだから」

「そういうの別に気にしないから」

「だいたい、幼稚園からの腐れ縁みたいなやつ、何をいまさら。」

「ダメだってやっぱ」

「若干ムカついてきた。腕をつかんで引きずり込む。」

「バカ！」

「あんたが考えすぎ！」

しかし、考えが甘かった。この時、私は自分の部屋のひどさを忘れていたのだ。ばたん、とあいつの倒れこむのと同時に戸を閉めた。明らかにあいつの顔面が赤くなっていた。

「そんなに気にしてんの」

「黙りこくって何も言えないらしい。」

「ほれ、汚いけどこころへんなら座っても大丈夫だから」

一気に体が緊張してきたらしく、正座するまでとんでもない時間がかかっていた。

しばらくしても気恥ずかしさが抜けないうらしく、そわそわしていた。

「……出てもいいからね」

もう体が言うことを効きません、立つのも大変なんです、みたいなことを訴えかけているらしい。

「……おまえさ、気にしないの？」

「何を？」

「自分の家に、異性泊めるの」

「あんたを男とかそういう目で見てないから。こんなやつと昔からのやつ」

「ああ、そうなん、だ……」

「じゃあ逆に聞くけど、あんたは私をどう思ってるわけ？」

「いやそれは……」

「まさかあんた好きだとか言わないよね？」

「黙った。」

「違うでしょ？」

下を向いた。お顔が桜色に。

「……違うでしょ？」

「ちよつとも動けそうになかった。」

「……ほんとに……？」

「だ、だって」

「なに」

「お前、本当に優しい、から……」

「あんたねえ、友達にやさしくするのは当たり前でしょ」

「女なのにな？」

「友達に性別もなにも無い」

「そう、なのかな……じゃあ、俺が勘違いしたバカってわ

「あ、でも」

「なんだよ」

「あんたがモテるのは事実」

「は？」

「あんた、本当に自分のこと分かってない。この前の期末テストは、教科50点満点でいくつだった？」

「……四百八十九でした」

「んで、体育の成績は？」

「……全部Aです」

「この前のバレンタインデー、チョコは何個もらいましたか？」

「……二十個」

「それを世の中ではモテるっていうの」

「はあ……」

「それなのに、告白されてもフリ続けて数年。理由は他に好きな人がいるから。まさかそれが私っていうわけ」

「……はい」

「あー、バカみたく思えてきた。腐れ縁は腐れ縁で、恋愛とかそういうものとは全く違うと思ってきたのに。怒りが、こみ上げてきた。とっさに、オサムの首もとをつかむ。」

「ああ！？なに！？」

「お互いバカだね」

「はじめてだった。あいつもはじめてらしかった。あいつの首に腕を回す。変な息が漏れる。単純にあいつが苦しくなっているだけだった。けど、私の腕の力はなおさら強くなる。どうしようもない。」

（バカ、クルシイ）

背中をそっとたたかれた。いよいよ苦しさが限界まで来

たらしかった。

深い呼吸をする。

「人のお願いをきけ！」

「ごめんごめん……」

そのあとは何も言えなくて、結局時間が遅くなったからって言って部屋に戻っていった。

歯磨きとかなんとかを終えて、ベッドにゴロンとする。

——さつきはゴメン

——私もごめん

——俺から話したんだしいいよ

……寝よう。どうせ明日も休みだし、今日明日はだらけていいと思う。

——明日

またあいつ。

——なに？

——予定ある？

——明日はひましてる

——電車乗ってどっかいかん？

——お母さんおるし車乗せてくれるかも

——いや、二人で出かけた

……まじかあ。

「……まじかあ。」

腐れ縁つてのも、こうやって時間が経つと変わるんだなあ。

《おわりに》

小田たつえこと、なんと文学部四年になってしまった者です。この作品は短編かき集めで「ロンドンの呼び声みたいな」というタイトルで掲載予定だった一篇です。

ほかの短編が完成していないことと、これだけでも良からうという意思のもと掲載した次第です。もしかしたら今後、正式に先述のタイトルで掲載するかもしれません。

卒論ハードモードの専攻に属しているため、今年は寄稿頻度をかなり落とすと思われます。新入生には申し訳ありません。ですが、とりあえず一年以上にわたって不定期連載している作品「無題(仮)」を終わらせることが目標です。それでは。

二〇二二年三月二十九日